解　説

石川　清子

ヤミーナ・ベンギギを中東文学選に入れるのは二つの理由で躊躇いがある。一つは彼女は何と言ってもシネアスト（映画監督、ドキュメンタリー映像作家）として経歴を積んできたこと、もう一つはアルジェリア人の両親をもつものの、フランス北部の工業都市リールで生まれ、フランスで教育を受けフランス語で作品発表するフランス人だからである。

ベンギギ作品を翻訳し、あえて「文学」として紹介するのはそれなりの理由がある。『移民の記憶――マグレブの遺産』はここに訳出した書籍と並行して、一九九七年、映像資料や音楽とインタビューを重層的に構成したマグレブ移民の歴史をたどるドキュメンタリー映画として、まずテレビ放映、その後、劇場上映されてフランスで大きな反響を呼んだ。初めに映画としての『移民の記憶』ありきだが、同名の書籍は映像作品をなぞる活字版やシナリオではなく、映画とは別の編成、構成がとられている。訳者としてはここに、「文学テキスト作家」たるベンギギの意志を認めたい。またベンギギは、扱う対象としてイスラーム圏の女性全般を視野に入れ、現に映像作家第一作となる一九九四年のドキュメンタリー映画『イスラームの女たち』(*Femmes d' Islam*) ―― 以降のベンギギの営為の出発点と言っても過言ではない―― では、フランス、マリ、インドネシア、イエメン、アルジェリア、エジプトと、多くのイスラーム圏の国がとりあげられ、「フランス人」ベンギギの関心と活動が越境的で振幅の大きなものであることを示している。「中東」から連想されるステレオタイプなイメージを一度打破するのがこの文学選の意図の一つならば、中東地域にも分け入りながらフランス的なるもののイメージをずらしていくベンギギのテキストはこの選集にふさわしいのではないか。

一九五五年にフランスで生まれたアルジェリア移民二世のベンギギの活動を振り返ると、結果的に、彼女と同じ立場にある者たち――マグレブに出自をもつ者、フランスの地では異質のイスラーム文化を背景にもつ者、二つの異なる文化のなかに身を置く者、かつそのなかで女性という抑圧される立場にある者――の意見代表役の一人になっている。自身、前向きで積極的、しかも野心的な意志の持ち主であるのだろう、政治の世界でも重用され、最近ではドラノエ市長のもとパリ市助役（人権擁護と差別との闘い担当）、オランド政権下で外務大臣付フランコフォニー担当大臣を務めた。

映画『移民の記憶』はベンギギ二作目のドキュメンタリーで、前作で行ったインタビュー形式を踏襲している。第一作で多数のマグレブ出身の女性たちからフランス到着直後の話を聞き、その後、スタッフとともに二年間で三百五十人のマグレブ移民の家族のインタビューを行ったと言う。その後、二〇〇一年には、さらにその延長として、『移民の記憶』で自らを語った女性たちすべてを一人の主人公にしたようなフィクション『インシャーアッラー日曜日』(*Inch'Allah Dimanche*) を映画と小説で世に送り、また最新の作品には、パリ郊外に住むアルジェリア移民第二世代女性を主人公にした四作のテレビドラマシリーズ『アイシャ』(*Aicha*, 二〇〇九―二〇一二) がある。繰り返しになるが、ベンギギ作品は自らと同じ境遇にある者とその周囲に向き合い、それを検証し声にするという一貫性をもっている。

訳出したテキスト版『移民の記憶』の前に、映画について紹介しておきたい。二十世紀の終りまで可視化されず散在し、当事者たちがあえて語ろうとしなかったフランスにおける戦後マグレブ移民の歴史を初めて集合的に編んだ一大サガとも呼べる映画である。ベンギギの両親と同世代、そして自身が属する次世代の歴史を「父

たち」「母たち」「子どもたち」という三部構成のインタビューと過去の映像でたどってゆく。「栄光の三十年」と呼ばれる戦後フランスの高度経済成長期を支える安価な労働力として、単身で海をわたり悲惨な住環境のなかで働いてきた父たち。七〇年代のオイルショック後に家族統合政策によって夫のもとに呼び寄せられ、自国の伝統を維持しながらフランス社会に溶け込む努力をしてきた母たち。幼少時に母と海をわたったか、あるいはフランスで生まれ、「危険な郊外」のレッテル貼りをされる大都市周縁の巨大集合住宅で成長し、二つの文化のどちらをも十全に享受することのない子どもたち――おそらく、彼ら三代の歴史はこう要約されるだろう。映画版は日本でも二〇〇七年に自主上映のかたちで紹介され話題になり、その後も外国人移民労働者とそのホスト国定住の問題を考える際に参照される映画になっている。

この映画の秀逸な点は、大河ドラマにも比する長大な三部作をとおして、これまで暗部にあった半世紀の詳細を当事者自らの言葉であぶり出したことにあるが、それに加えてフランス側の移民受入事業に関わった行政関係者や研究者へのインタビュー、当時の報道ニュースなどの映像、そしてマグレブ移民が当時ラジオやレコード、後にはカセットで聴いていた流行歌がふんだんに使われている。各部は数名の当事者たちのインタビューをメインに進行していくが、フランス側の証言、当時の画像・映像が絶えず挿入され、映像に音楽が重なり、観る者はきわめて個人的な物語の場に居合わせつつ、フランスとマグレブをつなぎながら過去に遡る重層的な時間の流れのなかに身を置く経験をする。

訳者の個人的な回想になるが、映画『移民の記憶』を仏語版DVDで見てからテキスト版を読んだのか、それとも逆だったか記憶が混濁している。しかし、今回の抄訳のもととなったテキスト版を読んだ時、本書は然るべきかたちで、つまり日本語となって日本においても読まれるべき本だと強く思った。

書籍も映画と同じく三部構成をとるものの、まず全体の序文があり、次に各部が続く。各部冒頭に時代を俯瞰した短文と、それぞれインタビューをもとにした四つから六つのエピソードを含む。今回、序文と各部からそれぞれ一つのエピソードを訳した。興味深いのは、映画と同一人物の話でも、内容が殆ど映画と重複せず、別の人物の物語を読んでいる気がすることである。それほどまでに同じ素材から映画とテキストで別のものが作られている。「父たち」のハムー、「母たち」のゾフラとラディヤは映画にも登場している。『移民の記憶』でベンギギが成し遂げたことは、社会学、歴史学、ジェンダー学、人類学を横断・統合して社会の表に出ることのなかった人々の声や生い立ちを公に届けたことだが、テキスト版はそれに加えて、それぞれのエピソードの人物を実に繊細な視点で観察しながら言葉を引き出し、聴き手たる自分は直接声を発することなく、相手の過去の時間へと最大限に寄り添おうとするのが伝わってくる。

聴き取りという旅の「私の記録」である本書はテキストとして編まれることで「かれらの物語」さらには「私の物語」へ変容する。不特定多数の人の物語を個人の物語へと変容せしめる力は、少なくともそうありたいという意志は、著者たるベンギギの文学的なものへの希求とあえて断定したい。

一九九七年のフランスは公立教育機関でイスラーム式スカーフを認めるか否かがマグレブ系フランス人に関わる最大の争点だった。本書でベンギギは問題提起をそこから始めた。しかし時代は変わって、二〇〇五年には郊外の若者の全国規模の暴動、それに続くイスラーム原理主義に傾倒する若者の増加、そして二〇一五年一月のシャルリ・エブド事件と、移民二世三世をとりまく状況は大きく変わり、より深刻になっている。本書がどこまで有効かはともかく、なぜマグレブをルーツにもつものが今フランスの地にいるのか、その歴史／物語を確認するためにこの書は不可欠だと最後に添えたい。